九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[005] 九大國文學會報 : 5

https://doi.org/10.15017/15461

出版情報：九大國文學會報. 5, pp.1-46, 1933-06-27. 九州帝國大學國文學會
バージョン：
権利関係：

昭和八年六月發行

會報

第五號

九大國文學會

目次

——第五號——

小閑徜徉……春日政治…(一)
近詠十二首……小島吉雄…(六)
萬葉集用字法の體系的研究……笹月清美…(七)
蕪村を描く……白井田敏雄…(一四)
源氏物語に於ける夕顔の素描……瀬古確…(一八)
八田知紀と高崎正風の紀行文……波多江種一…(二五)
日記文學の創作性……藤井毅…(三二)
和泉式部日記「おひたるあし」考……青敏夫…(三五)
ドンタク風景の放送を聞きて……橋本元二郎…(四〇)
消息に代へて……加藤卓一…(四〇)
日記の隅……畑茂…(四一)
志賀島雜詠……山田猛…(四二)
先輩萬來福帳……笹月清美…(四三)
雜報……(四四)
編輯後記……(四五)
定欵……(四五)
會員名簿……(四五)

小閑徜徉

春日政治

一

六月三日土曜日の午後であつた。私は福日新聞社の俳畫展覽會といふを觀にいつた。主として現代の人の作を集めてあつたが、もとより大した意味のものでもなし、殊に私は畫の事はわからないからでもあらう、實は餘り之といふ印象も殘さなかつた。只私の感じた一つは俳畫はむしろ俳句の客であつて、何と言つても文字が第一であるといふことであつた。そこで俳人の書といふものには無論面白いものもあるが、只それが異樣であり奇態であるだけであつて、そこに些の趣味も風韻も求められないものが亦少くない。尤も俳句の優劣が必ずしも文字の如何には關しない事であるし、文字の巧拙は或程度までは如何ともなし得ない所があるが、書は只眞面目にさへ書けば見るに足るものであつて、要するに眞面目を缺くことが俗になり邪に入る本であると思ふ。

會場の中程へゆくと、正岡子規の「法隆寺の茶店に憩ひて」と題した

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

といふ句碑の拓本一軸がある。之は寒山落木の子規自筆の句稿を擴大して刻んだものであるが、やはり場内に光つてゐる文字の一つであつた。子規は元來手跡が非凡なのに、それが極めて眞面目に正しく書かれてあつて、所謂俳味といふやうなものは漲つてゐないにしても、先づ其の氣品に壓せられる。會場の最も奥に浦忠倫氏藏の子規の書簡が陳列されてあつた。之は曾て何處かで聞いたことのある淡い記憶があるが、彼の愚庵和尚に宛てたそれである。前に相馬御風氏が添書き

をしてゐるが、明治三十一年子規が「歌よみに與ふる書」を新聞日本に出しつゝあつた其の三月廿六日附のものである。私がそれを覗いてゐると、或人が來て「子規の字は餘り巧くなかつたのでせうか」と言はれたほど、書體が平凡であつて、手紙といふよりは寧ろ新聞の原稿とでもいふべく、細字にしかし丁寧に楷書に書かれてゐるものであつて、寒山落木の句稿よりも一層平凡に見えるものである。なるほど一見巧さは消えてゐるが、よく見れば其の正しい處異のない處に子規の文字の巧さの根柢があるのであると思はざるを得ない。この正しく異のない根柢があつてこそ、子規は一面流麗な所もやれば、又一面枯淡なものをも自由にやり得たのではなかつたらうか。現にこの手紙の直ぐ上の壁にかゝつてゐる内本紅蓼氏所藏の子規の書簡（大磯よりの）の如きは、凄いほど巧みな草體であり、而も雅味に溢れたものである。

源氏物語の作者は女性の品評に於て、通人馬頭をして、比喩を木工や繪畫や書道に取つて語らしめてゐるが、其の書道については、

手を書きたるにも深きことはなくて、ここかしこ點ながに走り書き、そこはかとなく氣色ばめるは、打見るにかど〳〵しく清げなれど、なほ誠のすぢをこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一たび取並べて見れば、なほ實になむよりける。

といつてゐる。今の人の文字にはこゝかしこ點長に走り書いて、そこはかとなく氣色ばめるものが少くない。それに反して今見た子規の書簡の如きは、うはべの筆は消えて見えるが誠の筋を得たものである。馬頭は其の話の終に、

はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時にあたりて氣色ばめらむ、見る目のなさけをば、え賴むまじく思ひ給へ侍り。

と一つの結論を置いてゐる。吾等はこゝで學問の事が亦さうであることを省みたいのである。即ち學徒にして正しい誠の根柢を得てゐない間は、言ふこと書くことが、要するに俗氣に滿ちた畫や書と同じであるといふことである。

さて子規のこの手紙は「歌よみに與ふる書」と同一の見解を要約したともいふべきものであるが、其の道に精進する熱意が一篇に溢れてゐて、流石に子規その人であることを思はせるものがある。彼は其の副仲の部に次のやうに言つてゐる。

歌も詩も俳句も慰みにやれば面白き一方の者なれども私などがやるのは職業の如き者なればからだのために惡いと知りつつも歌の研究に思はず夜を更すに至り申候これも執着の迷なるべく候

學問殊に文學にはたしかに遊戯氣分の一面がある。しかし遊戯も專門になれば亦それに死生の苦しみの伴ふことは、今の運動競技を見ても知れる。こゝに子規の所謂職業といふ語は、唯一專門の仕事といふ意味に解されるが、學問といふことを專門とするものに、死ぬほどの苦患の伴はない間は、それは未だ慰み半分にやる餘技にしか達してゐないかも知れないと、自ら省みられるものが切であつた。

二

福日を出た其の足で、川端町の文照堂がやつてゐる先哲遺墨展覽即賣會といふものに廻つて見た。これも名前は大袈裟過ぎるとは思はれたが、書畫商の持寄りであつて、其の方面から見れば相當豐富に集められてゐたのだらう。道樂一遍の採集癖に墮したくない私、勿論高價なものは買へない私は、何時も觀せてもらふのが主であつて、買ふことは警めてゐる極めて吝な御客である。かうした書畫の間に國文學の新資料などを發見することは殆ど望まれないことであつて、買ふことはたとへ廉い價のものにしても、さして用の無いものを集めることであつて、結局道樂に墮することになるからである。さはいへ國文學に關係のあるものには、やはり欲求が起るのであつて、亦國文學に關係のあるといふことが自己に肯定させる理由となつて、さして役に立たないものをつい買つてゐることもあるのは、やはり惡い癖に陷つてゐるものである。其の日も——披露するには甚だ貧弱過ぎるが——靑柳種麿（福岡の國學者）のメクリは葛野王の遊龍門山であつて、懷風藻の詩を書いてあるのに興味を引かれ、伊藤常足（種麿の門鞍手郡の人）の短冊は極めて汚ないものであつたが、近

松の戯曲丹波與作を詠んであるので欲しくなつた。尙、佐久間種（小倉の歌人）の歌物一幅はそれが人麻呂を詠んだものであり、而も萬葉書きにしてあつたのに心が曳かれて買つて了つた。値段などは無論言はない方が花である。私は今佐久間種の歌を左に揭げることにするが、萬葉書きを讀む練習に、諸君の讀試みられることを望む。原物は書續けであるが、句だけは私が分別して置いたから讀易からうと思ふ。

讃人麿呂像長歌

檜乃葉乃　名爾負御代叙　國風乃　盛也計累　其中爾　春野乃草乃　短貴波　赤人勝連　秋乃野爾　生留眞葛乃　長貴波毛　此老翁秀畢　然例古曾　神共稱皿　聖共　相珍良之美　世々久爾　偲比八來而有　熟爾　其世想皿伐　長貴方　能與武人毛　數多爾　有八在之乎　飛驛人乃　巧毛不及　青雲乃　高幾調盤　此老翁爾　誰可競八武　不二之根乃　拔出之老翁序　伊加奈例婆　五百年千年　前後刀　世乎阻計無　名細支　此老翁刀吾刀　同世爾　生之逢南伐諸共爾　思杼知共　睦八武者乎

明治二年十二月　　六十七翁果園種

私がこの歌を見て、すぐ氣にかゝつたのは其の假名遣である。假名遣といつてもさして誤のある譯でもないが、それが萬葉書きにしてあるだけに、自然其の用字を萬葉集のそれと比較したくなるのである。例へば人麿呂の麿の字なども古く見ない用字であつて、何となく奇であると考へたり、萬葉集では長キ・短キのキには貴や幾を用ゐない、コソのコには古を用ゐない、助詞のトには刀を用ゐないし、ドチのドには杼を用ゐないといふ、所謂特殊假名遣のことを考へたり、殊に皿字をへに用ゐるが如きは、記・紀・萬葉の古假名には無い所であつて、これはへの字源を求める爲に、皿の草書に附會した後世の謬說から使用し出されたものだなど考へたりすることが是である。今日そんな事を咎め立てする必要のありやなしやは別として、或は之を佐久間種などに責めることの當否は措くとして、少くも今吾々が試みたならば、今少し萬葉集

の古體に近く用字することが出來たことを思ふ。かく吾々が之を氣にかけることの出來るのは、それだけ萬葉集の用字法が古人よりも深く認識されてゐるのを表してゐることである。それだけ吾々が古人に比して學問上一歩進んだものを持つてゐることである。私はこゝで假名遣の事をいふのが本意ではないが、只一事は萬事である。この特殊假名遣の事にしても本居宣長が創めて言出したことであるが、今日の吾々はそれに就いて宣長の知らなかつた多くの事實を知ることを誇りとするし、又今日尙それに就いて知られない事實がやがては求められることが豫想されつゝある。學問に從ふものの望は實にこゝにかゝつてゐる。學問の事は只古人前人を追掛けてゐることではない、少くも古人前人を追拔くことにあるからである。國語・國文學の研究の目醒ましい發達をした今日、前後左右を顧眄する時、誠に望洋の歎なき能はずではあるが、亦それだけ多望であつて、前人未開發の地域は我等の爲にいくらでも殘されてゐるのである。（昭和八年六月十九日稿）

過龍門山　　葛野王

命駕遊山水　長妄冠冕情　安得王喬道　拠鶴入蓬瀛

六十九翁　柳園書

（政云、過字は懷風藻通行本には遊に、妄字は忘に作つてある。拠字は控字の草體から、多分種麿が書損したのだらうと思ふ。）

しけのゐ三吉にわかるゝ所

ふり捨てゝゆかは泪はうまやちの鈴鹿の山の雨となりなむ

常足

近詠十二首

小島吉雄

人は年をとるに從つて忙しくなるものらしい。わたくしも一昨年より去年、去年より今年と、年を食ふにつれて身邊が多忙になつて來て、最近數週間の如き決して誇張ではなく三時間ぐらゐの睡眠しかとれないほどだ。さやうな譯で、是非消息を差上げねばならぬところへも兎角義理を缺き勝ちである。地方の會員諸兄からも御手紙や御通信に接しながら、貫ひつぱなしになつてゐて缺禮してゐるのが尠くない。本誌にも委員の方から何か書くやうにと命ぜられたけれど、これまた期日までに間に合はすを得なかつた。止むを得ず、急いで手帳の隅々から腰折れを少しばかり書きぬいて、一つは本誌への責めを果たすと共に、且つは勝手ながら會員諸兄への平素御無沙汰のお詫びにかへたい。

梅の花今さかりなり頰白の來鳴くあしたの心ゆたかさ

わがやどの未だ芽ぶかぬ庭木々に小鳥來よりつ昨日も今日も

ただ靜かにおのれをまもりありぬべし家いでぬ日の此の頃つづく

新しく軸かけかへてわがをれば近くまた遠くうぐひすの啼く

葉櫻蔭に手づくりの鮨もちださせ日曜の晝は物念ひもなし

わがやどの櫻葉かげのさくらんぼう採りてふふみて物念ひもなし

庭先の草むしりをれば葉櫻ごしに野球放送さわやかに聞ゆ
潮鳴りのさやかにひびく朝庭に八つ手はゆれて露しづくせり
此のあさけおもはぬに啼く老鶯の徹夜づかれの耳おどろかす
家ぢゆうをあけはなたせて堀出しの書物曝書すたのしみはこれ
キネマをも見ざる久しみ世にうとく讀むは文選古今和歌集
出で入りにやさしきものに見やりつつわがかどのべの露草の花

萬葉集用字法の體系的研究に就いて

笹　月　清　美

萬葉集用字法の體系的研究をめぐる時枝誠記氏と森本治吉氏との論戰は、まことに興味深いものであつた。その發端は時枝氏がその著『古典註釋に現れた語學的方法』（京城帝大法文學部編『日本文化叢考』）に於いて言及された森本氏説への批判にあつたのである。

時枝氏によれば、

言語への還元を目指す時、萬葉人の文字記載に對する關心を深く探つて見るといふ研究が先づ無ければならない。此の意味に於いて、私は、既に成立した文字と訓とに於いて、その出入を檢し、只讀まれたものに立脚して、之を考察しようとされる森本治吉氏の用字法研究の所論と相反する立場を持つてゐる。（前掲書一〇〇頁）

而して

用字例の體系を組織するには、用字例考察の歴史を離れても成立し得るが、記載の心理を離れて、之を整理分類することは、用字例の本質的考察に悖るものである。（前掲書一〇六頁）

げに森本氏は、こゝに批判の對象となつた、その『萬葉集の研究』（岩波講座『日本文學』）の中で

萬葉集用字法の體系とは、畢竟後世の學者の知的滿足の對象としてのみ存在するに過ぎぬ。……

一般には「萬葉集の用字法の研究」とは、萬葉人の持つてゐた用字意識を探り出す探見だと信ぜられてゐる樣である。……

併し、萬葉人にさうした用字體系の認識などの無かつた事は上に記した。故に、私の解する所では、用字研究とは、無から有を作り出す作業である。（同書四四―四五頁）

と云つてゐられるのである。

こゝに兩氏の論爭に於ける第一の問題が提示されてゐる。それは、萬葉集の用字法の體系的組織には、萬葉人の用字意識を無視してよいかどうかと言ふことである。

この點に就いては確に森本氏の說に重大な誤謬があつた。その誤謬は氏の時枝氏への逆批判である『萬葉用字研究に對する批評に就いて』（『文學』第九號）に於いて明瞭に露呈されてゐる。何となれば氏はそこに於いて、

萬葉人には個々の文字使用に對する關心や意識は有つても全般的な用字體系の認識などは無かつた。……

問題が體系的研究に關する限りでは「用字法研究は萬葉人の用字意識を無視してかゝつて不都合は無い」といふ自說は、天下萬世に渡つて不易妥當の正說だと確信する。

と言つてゐられるからである。用字體系の認識がなかつたから體系的研究には用字意識一般を無視してよいと言ふ命題は

論理的に必然ではない。然かも事實的にも誤つてゐる。何となれば、用字體系の認識が存しなかつたことには拘りなく、體系は現象の中に含まれてゐるものであり、用字現象は用字意識に基くものなのだからである。現象的事實に無關係の體系、『無から出た有』は科學的の何物でもあり得ない。森本氏の言はれる『夫夫の研究對象たる天然の事象中には存在しない學的體系を作り上げて研究進展の便宜に供してゐる』動物學者や植物學者が果して存在するであらうか。

用字意識を無視してよいと云ふ主張と共に、この逆批判の中にはも一つの逆襲を含んでゐた。それは『體系を樹てる場合、既に成立してゐる訓によらずして體系を樹てるなど言ふ事が出來得る事かどうか』と言ふ難詰である。

これらに答へる時枝氏の再批判は『萬葉用字法の體系的組織について』（『國語と國文學』昭七・五）であつた。氏はこゝに於いて體系樹立の方法に就いて三つの契機を指摘されてゐる。その一は、用字法の研究は用字法研究史を離れて用字の現象そのものに直面すべきこと、從つてその二に、用字の現象を根本的・原理的に考察する爲めに先づ文字の本質より始め、當面の問題たる漢字の性質に及び、それに對する萬葉人の意識より出發すべきこと、而してその三には、萬葉集の用字を日本用字史の一齣として把握すべきこと、これである。時枝氏はこのやうな觀點から氏自身の體系を表示し且つ森本氏のそれを強く否定されたのであつた。

問題の對象を現象そのものに還元し、用字の客體たる漢字の本質より出發し、他方、用字史的・全般的の觀點に立たねばならぬと云ふことは、當然のことながら兩氏の論爭に於いては重要なる第二の中心問題であつた。

思ふに時枝氏の體系に於いて分類の第一原理となつた表意的方法と表音的方法とは、形音義を有する漢字の本質より當然豫想される所であり、又用字史を通じて規範的原則として存する所でもある。私はこれを古來の用字觀念に從つて、眞名・假名と稱しようと思ふ。

國字＜眞名……（漢字）
　　＜假名……（假名）

眞名・假名の名稱は古くから稱へられた所で、例へば源氏物語梅枝にも

いたうなすぐし給そ、にこやかなるかたのなつかしさはこゝなるものを、まなのす、みたるほゞにかなはしゞけなきもじこそまじるめれ

なゞ、ある。德川時代に於ては學者が文字の區別をなすに用ゐた術語であり、一般に通用されたものである。そしてその意味は、古く『倭片假名反切義解』（群書類從四九五）の序に

凡國家用二文字一有二眞字一有二假字一。眞字對二假字一正也、假字對二眞字一權也（中略）訓二日月一曰二比流圖幾一。比流圖幾即日月假字也。日月即是比流圖幾眞字也。都不過於以義爲二眞字一音爲二假名一云々

と述べられたやうに、表意的用法及び表音的用法をいふのであつて、この概念で自分の時代までの全用字史を認識してゐたものと思はれるのである。そして現代に於いてはそれが、漢字・假名の名稱に變遷してゐる。それは現代に於いて假名の字體及び字母が標準的に固定したのでこれに對する眞名を漢字と呼びかへただけである。

漢字渡來の時代は茫漠として遙かの昔であるが、その後の何れの時代と雖、眞名と假名（或は漢字と假名）の二つより外は存しなかつた。從つて用字史の發端に於ける現象は實に眞假名の形に於ける假名の發生及び發達であつて、その點に就いては春日先生が『假名發達史序說』（岩波講座『日本文學』）に於いて詳細に論ぜられた所である。

抑〻假名には眞假名と略體假名とがあつて後者は前者の歷史的變遷の結果發生したものである。そして同時にそれは用字史上の使用順序でもあつた。即ち

眞假名時代は推古朝を發生期、飛鳥藤原朝を發達期、奈良朝を隆盛期とし、略體假名時代は平安朝初期を其の發生期

とし、以後を發達期と見るべきであらう。

と春日先生は前掲書に於て述べてゐられる。從つて眞假名の本質は後世の事實から言へば漢字體をなせる假名であつて、字體・字母及び假用法の差をのぞけば假名たる本質に於いて何ら差異のないものなのである。その使用上の價値より言へば眞假名と雖も眞名に對する假名である。故に萬葉人が漢字に直面して抱いた用字意識も先づこの眞名・假名であつたと思はれる。

その理由の第一として考へられるのは、萬葉集時代までの漢字使用の歷史が示す所の事實である。春日先生が『假名發達史序說』に於いて

抑〻外國語を表記する外國文字を讀んで其の義を曉るには、其の音を讀み得ると共に其の字の原義を國語に譯するのみでなく、其の語序に至つても之を國語風に飜して後に可能となるのである。……

さて我が國の古代に在つて、漢文を讀むことが其の當初如何であつたかは問題であるが、歸化人によつて敎へられたとき、之を字音直讀にしたことのあるべきは勿論であるが、亦夙く字訓反讀にすることも行はれたらうと想像される。（全書九頁）

と言つてゐられるやうに字訓反讀の時代があつたことは、和化漢文が存在して『漢文になき措辭法、國語風の助詞の用法、若しくは敬語法を交へてゐる』ことによつて逆に證明される。この時代は用字意識を中心としてみれば、眞名のみの時代、眞名を以て和訓を代表せしめた時代であつたのである。

眞名とその和訓とは、眞名の持つ義を仲介として連絡してゐるのであつて、從つてその間の關聯は必ずしも固定的に緊密ではなく、義の等しい又は等しいと考へられた範圍に於いて相當に動き得たものであつたと思はれる。このことは現代に於いてさへ猶ほ存する現象である。このやうな眞名使用の中から假名が發生し始めた。先づ固有名詞を、次いで一般に

和訓をその義を仲介とする眞名で表記することをせず和訓の音そのまゝを直接に表現しようとして漢字の音のみを假用する場合を生じた。それが假名の初めであつて、そこに假名に對する用字意識の起源もあるのである。更に字音のみならず字訓が假名に假用され始めたのは一般的に云へば訓と漢字との間の關聯が密接となり、字訓がある漢字のそれとして固定して來てからのことであると言はなければならない。このやうにして萬葉集の時代は、眞名の上に更に假名を用ゐると云ふ意識の時代となつてゐたのである。

次ぎに第二の理由として萬葉集の用字そのものに就いて見ても『眞名に對する假名』の意識が基本的な用字意識であつたことは明白である。例へば森本治吉氏によつて『文字があつて讀の無い場合』即ち『不讀文字』と稱せられた用字法がある。氏によれば

肩乃間亂者（七卷一二六五）

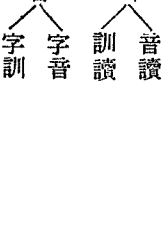
の場合に於て、「間」は讀の上からは全然無用の文字である。此の字が無くとも「亂」（マヨヒ）とよめる。其れに尙此の字を附加した理由は「亂」は集中ミダルとよむのが通例である。一方マヨヒと云ふ語は此の七卷と十四卷と二例きり無い特殊語である。之に唯「亂」字を當てては誤讀の憂がある。故に上に「マ」の音を有する「間」字を附加したものである。（『萬葉集の研究』七六頁）

と言つてゐられる。このやうな例は他に多い。これらこそ萬葉人の用字意識が『眞名と假名』であつたことを明かに示してゐる。前にも一寸言つたやうに眞名は義によつて和訓を代表するものでその間の聯關は必ずしも固定的ではなく、從つて和訓の音の一部を假名で表記してその標識としたものであつて、現代の送假名はそれと同じ現象である。萬葉集ではこれを或は上に加へ或は下に加へてゐるが、讀みと云ふ上から云へばこの眞名に附加された假名こそ讀みをあらはす文字であつて決して『不讀文字』と云ふべきではない。

宣命體も用字意識より見れば、眞名と假名との辨別の意識の存した明證である。この樣な辨別の意識が存したればこそ假名のみがその字體を略體化して特殊な國字を形成し、終に漢字に對立するやうになつた次第である。

眞名・假名と云ふ用字意識は、用字史を通じて最も根本的なものであつた。故に用字法の研究に當つては仙覺以來の殆んどすべての學者がその分類の第一原理としてゐる。唯名稱や概念內容に多少の出入があるのみである。

眞名には音讀すべきものと訓讀すべきものとがあり假名には字音を用ゐたものと字訓を用ゐたものとがある。



而して萬葉集に於ける假名の音訓の假用の方法は今少しく細かい範疇に分たなければならない。

さて用字法一般に就いて今一つ顧みられなければならない問題がある。それは文字の使用に一般的なものと特殊的なものとの存することである。

一般的な用字とは或る時代或る社會に普通な用字意識に基く所の基本的な用字であつて右に考察した體系はその內部構造である。然るに或る時代又は或る社會に於いて一般的な用字以外に特殊な意識に基く用字の現象が存する。この現象はその用字意識の特殊性に應じて種々な特殊な方法が一般的用字の上に加へられたものである。そこには知的興味・文學的趣味・宗教的或は典據的意識などに基くものがあり、萬葉集の戲訓などこの一例である。これらの特殊な用字法は一般用字法と別途に考ふべきであると思ふ。この事については既に吉澤博士も論ぜられた所である。（『國語・國文』昭八・一）

（甚だ粗雜な言はでものことになりましたがこれで擱筆致します。昭八・六・八）

蕪村を描く

白井田敏雄

この頃私は或る方面から一文を徵せられたので、頭に浮ぶまゝに、蕪村に關する二三の事をものして送つておいた。ところが、幸に閲讀の榮を賜はつたらしい或る人から、思ひもかけぬ駁論めいた手紙を受取つた。手紙の仔細は暑苦しいから省くが、要は斯うである。――君が觀る蕪村は、餘りに善良過ぎる。そして餘りに纖細過ぎる。蕪村といふおやぢは倨傲鮮腆、一世を睥睨してゐたものではないか。――

私は之を默殺しようと思つてゐる。反駁の筆をとる氣にはなれない。といふのは、此の手紙の主は、餘りに見當違ひの論鋒を私に向けようとしてゐるからである。こゝで、私のものした一文に就て叙べるべきであるが、これ亦暑苦しい限だからやめる。が、要は俳人としての蕪村の面目を中心としたもので、純粹な立場から一歩も外れはしなかつた。改めていふ迄もないが、純粹な立場といふのは、作品の中に、今日もなほ生きてゐる蕪村のことである。そして、此の立場を外れない限、蕪村が倨傲鮮腆、一世を睥睨した、なぎいふ事は全く思ひも及ばぬ事である。それでも尙ほ且つ論難の鋒を構へるなら、蕪村の俳諧に於ける倨傲鮮腆、傲慢不遜の特質を指摘してかゝらねばならない筈である。そこでこそ初めて、論難反駁の鋒を交へることも出來よう。が、何の根據もなく、私の蕪村觀を駁してかゝられても、たゞ默殺するの外はないのである。

およそ一作家を論ずるにあたつて、その作家の作品だけでは滿足しないで、いな肝心の作品は寧ろ疎略にしておいて、

やれ系圖はどうの、肉親關係はどうの、容貌はどうの、性格はどうの、やれ日常の嗜好品は何であつたとか、戀愛の方面がどうだとか、服飾はどうだつたとか、どんな歩き振をしたとか、とにかく、さういつたやうな事を云はぬと承知のゆかぬらしい論者が、世には隨分多いやうである。なるほど、かういふ方面の事柄を事こまやかに詮索するのはいゝ、何かの役に立たぬでもない。けれど、こんな方面の事で如何なる大發見をしたところで、作家の特質、作品の生命を動かす何の材料ともなり得ないといふ事だけは知つてゐて貰ひたいものである。

この手紙の主といふのも、不幸にしてかうした外道であるらしい。私は外道を相手に論を構へる氣にはなれない。で、私の一文に對してなされた論駁である限り、問題は之で打切りとなるわけだが、さて、私は靜かに反省して見るのである。人間としての蕪村、凡愚としての蕪村に、果して傲慢不遜、一世を睥睨したやうなところがあつたか、と。

作品とは全然關係なしに、乏しい資料の許すところに依つて、具體的な、眼に見る人間蕪村を構成して見度い。そしてそれを、極めて坐談風に述べて見たいと思ふ。

一見したところ、蕪村は、どちらかといへば柄の大きい、骨格の目立つた、がつしりとした感じの健康體の所有者であつたらしい。顏などの印象は、所謂好好爺といつた感じよりは、寧ろ、俊異卓拔人を畏れしむるやうな或るものを眉目の間にひらめかしてゐたであらうか。それは同時に、自己の藝術へのひたすらなる憧憬から、俗愚を超脫せんとする淸爽なる氣宇のひらめきであつたに違ひない。酒も決して下戸ではなかつた。飲んで亂に及ばぬ程度の愛酒家であつた。京の自宅に門弟美妓相會して盛宴を張るやうな事も隨分やつたらしい。のみならず、同好の士を語らうて、灯ともし頃、打水さわやかな庭に下駄を脫ぎ並べて、料亭に上るのも一つの樂みとしてゐたやうに思へる。從つて、蕪村は、溫柔鄕裡の消息にも闇からず、其の方面の女性を俳友に持つてゐた事は作品に徵して明かである。老後に及んでもなほ此の方面との交渉が絕たれてゐなかつたらしい。「はか〳〵しく晝も不レ在、只柳巷花街にのみうか〳〵と日を費」した事を告白してゐる。

京都に一家を構へるやうになつてからの、家庭の蕪村はどうであつたゞらうか。夫としての蕪村は、さして幸福なものであつたやうにも思はれない。父として、娘を思ふ事の一通りでなかつた事は、蕪村自らも隨分筆にしてゐる所であるが、妻との間に就ては、何等語る所がない。だが、妻に就て語る所がないからとて、幸福な夫ではなかつたとは固より云へぬ。いな、却つて交情の濃かであつた證左とも、とればとられる。ともあれ餘り立入らぬ事にしておくが、俳句に徵するところ、どちらかといへば、一抹の淋しさがあつた事は事實である。これに反して、娘に就ては、何かと氣を揉んだらしい。娘によかれと許した緣談も、先方の俗臭思はしからずして、あたふたと結婚解消をやるなど、なか〳〵いゝお父さんであつた。

社交場裡の感觸といつた點は、まづ普通といふ所ではなかつたらうか。「とかく世ニ處スルニハかんしやくの氣味なき樣に人情ニしたがひ御くらし可被成候」といふあたり、うき世の實情に乘つて行く、所謂世渡りの道にも決して疎くはなかつた。己が生活上の後援者には「當時浪花第一之俳家被存候」などと甘い水を向ける事を心得てゐる蕪村であつた。かういふ物わかりのいゝ一面には、時あつてか、痛烈骨を刺す辛辣味、人をみそくそにこき下ろす神經質らしさをも多分に持つてゐたらしい。神經質の事を云へば、蕪村は終生かの狐狸の怪なるものを信じてゐた事は、餘りに有名な事實だが、之などは、常識家としての蕪村の反面を有力に語る事のやうに思へるのである。

一體、蕪村の作品には、その句境に於て、その格調に於て、その色彩に於て、可なりな多樣さ、多彩さがある事は誰しも認める所であるが、蕪村の性格にも、何となくさうしたやうな多面性があつたやうに思へてならない。恐らく、蕪村と交りを結んだ程の人々は、誰しも其の心の複雜さに觸れさせられた事だらう。こんな方面に就て、更に仔細に筆を進めて見度いと思つたが、今その時間の餘裕を持たないのが遺憾である。

さて、かうした複雜な蕪村の性格を探つてゆく時、はからずも、そこに私は、或るすばらしいもの、不動の蕪村らしさ

の横たはつてゐる事に氣づくのである。多様な色彩は、結局黑の一色に包攝される。丁度それのやうに、あらゆる相背反した彼の心や生活上の動きといふものも、こゝに還元して、等しく蕪村らしさの名に於て肯定出來るやうに私には思はれる。

不動の蕪村らしさ、私の云はんとするそれは、彼のひたすらなる心、である。時あつてか實現さるゝ、作家としての純一無雜な統一心境である。云はゞ、作家としての蕪村のまことの心の發露である。

「右蜀棧自得之物にて候。――平安豪族甚價を募り奪はんと欲するものおびたゞしく、價千疋を以ていづれも望み候へども、先年より御約束仕候儀故、貴家へ納め申候。價連城に思召候はゞ早速御返却可被成候。少も不苦候。……愚畫近來兩三月畫力超乘いたし、專ら市俗の氣を脫却して、たゞちに元明諸公の赤幟を奪はんと欲するに至り候。只照鑒を願ひ候。右自負不遜のことは御宥恕可被下候」と彼は云つてゐる。うか〳〵讀めば、横柄なものの云ひやう、なるほど、倨傲鮮腆、一世を睥睨したおやぢの風貌が浮んで來もしよう。「白せん子畫御さいそくのよし則左の通遣申候。かけ物七枚よせ張物十枚、右いづれも尋常の物にては無之候。はいかい物の草畫、凡海内に並ぶ者覺無之候。下直に御ひさぎ下され候儀は御用捨可被下候。他人には申さぬ事に候、貴子ゆへ内意かくさず候」「前かたも申上候歟こそんし申候、拙老はいかいは敢て蕉翁之語風を直ちに擬候にも無之、只心の適するに隨きのふにけふは、風調も違ひ候を相樂み、尤ヘンジヤクか醫を施し候樣に所々に而氣格を違へ候事に御座候。」所謂畫俳三昧の世界に出入し、あらゆる沈潛の深さに於てものせられた作品に向つて、蕪村は、狐疑する所なき自信を持つ事が出來た。此の自信、此の優越感は、時には餘りに率直に、赤裸裸に表出されたらしい事は想像出來る。それでも、「自負不遜のことは御宥恕可被下候」とか、「他人には申さぬ事に候、貴子ゆへ内意かくさず候」などと隨分謙讓の美德の持合せのあつた事を示してゐるのである。要するに、蕪村は根が純粹であつた。正直であつた。そして、此のひたすらなる心を、最も率直に打出すところに、畫人として、又俳人として

蕪村があり、世上一个の凡夫としての蕪村の本領があつた。

私は、もう此の邊で、此の一文を打切つておかうと思ふが、最後に、是非書加へておき度い蕪村の逸話がある。門弟の田原慶作なる人が、或夜、八時過ぎて蕪村を訪うてみた。いつになく戸は閉されてしまつてゐる。いかい早寢と、暫し内をうかゞつてゐると、盛んに何かはたく音がするので、怪しんでおとなうて見ると、戸を開けて蕪村が出て來た。入りて見れば内には他に人のけはひもなく、奥の間には帚なぎが散亂してゐる。聞けば丁度其の日、妻子の不在を幸ひ、芝居見物に出かけ、芝耕といふ役者の藝に感心し、夜一人でいとも熱心に見て來た眞似を演じつゝあつたのだ、とのこと。私は此の一事こそ、蕪村その人の本領を最もよく語つてくれるものと、この上なくおもしろく思つてゐる。蕪村を目して不純だの、傲慢だのといふやうでは、蕪村を語るにはいまだしい。

私のこの一文が、會誌に載つて私の手許にまで歸つて來る頃は、空にはあのすばらしい峯雲のかゞやきに、そゞろ海戀しい頃となつてゐることだらう。もの皆が汗を絞る時、此の駄文までが讀者をして汗をしぼらしめはせぬかと氣になる。何はさて、行水の湯のさらりと洗ひ流し給へかし。

源氏物語に於ける夕顔の素描

瀬古確

一

内裏(うち)よりの退出のみぎり源氏は日頃病んでゐる年老いた大貳の乳母を五條わたりなるその家に訪ねた。車を入れるべき門が鎖してあつたので惟光を召し出させて待つてゐる間にむくつけげなあたりの大路を眺めてゐると、すぐ隣の家から白

い籠越しに自分をのぞいてゐる女達の透影が眼に寫つた。その家の切かけだつものには夕顔の花がほこらしげに咲いてゐるので、隨身に一房折らせにやると黄色の生絹の單袴をはいたをかしげな女の童が出て來て『これに置きて參らせよ、枝もなさけなげなめる花を。』と言つて一本の扇を差出した。乳母と逢ひ祈禱のことなども指圖しておいた後、歸途につかうとして、先達ての扇を見ると

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕顔の花

と上品な女文字で書いてあつた。こんな所にも案外立派な女がゐるかもしれぬと、源氏は例の心からそれとなく惟光にその女の素性を調べさせたが惟光のはからひでいつとなくこの女の許へ通ふやうになつた。

八月十五日の月明の夜には『いざたゞこのわたり近き所に心安くて明さむ。かくてのみはいと苦しかりけり。』との源氏の言葉に強くはあらがはない夕顔と侍女の右近とを車に乘せて源氏はひそかに夕顔の宿りを後にした。古いなにがしの院についた頃はもう夜も白々とあけはなれる頃であつた。木立も凄い程繁りあひ池も水草に埋れてしまつてをり、ぞっとなく恐ろしげな所である。うちとけた夕顔の容貌は所がらか凄い程美しい。宵も過ぎ少しまどろむと、變な女が枕上に立つて『己がいとめでたしと見奉るをも思ほさでかくことなる事なき人を率ておはしまして時めかし給ふこそいとめざましくつらけれ』と言つて傍の女をかきおこさうとした。驚いて眼をさましてみると火も消えてゐる。薄氣味わるく思ひながら惡魔よけにと太刀を拔く。侍女の右近を起したが、これもおそろしさにふるへてゐる。渡殿の宿直人をおこして紙燭をもつてくるやうにと右近に言ひつけるが、こんなに暗くてはと尻込みする。仕方なく手を叩くとがらんどうの大きな部屋にこだまして氣味の惡い事この上もない。しかも渡殿にゐる人は聞えないのか出てきさうなけはひもない。源氏自ら西の妻戸に出て戸を押しあけてみると渡殿の火も消えてをり、うそ寒いそよ風が面をうつ。從者に燈火を命じ歸り入つて探つてみると當の夕顔は息もせず正體もなくなよ〳〵としてゐる。やつと持つてきた紙燭に照してみると夢に見たのとそつくり

の女がちらりと姿を見せて消えてしまつた。夕顔の元氣をつけようとゆすぶつてみると既に冷くなつてゐる。今までのしつかりした氣持もどこへやらこみ上げてくる悲しさのおさへようもない。いよ〳〵冷くなつてしまふと何だか氣味わるくもなつてくる。漸くやつてきた惟光と相談の上彼と親しい尼の住んでゐる東山に死體を移すことにきめ、源氏は一先づ二條院へかへる事にした。日も暮れてから惟光の來たのを召しよせて「いかにぞ、今はと見はてつや」と言ふ言葉も涙にふるへてゐた。惟光も泣く〳〵「今は限にこそは物し給ふめれ。長々と籠り侍らむ便なきを明日なむ日よろしく侍ればとかくの事いと尊き老僧のあひ知りて侍るに言ひ語らひつけ侍りぬる。」と言ふ。源氏もかの屍骸に最後の別をしたいものとその夜微行で東山の尼の住居を訪ねた。遺骸を見ても常と少しもかはつた所はなく、いかにも可愛げで恐しいといふ感じは少しもおこらなかつたので、かへつて悲しさに胸もふさがり歸りには加茂川堤で落馬するほどがつかりしてしまひ歸邸するやどつと床に就いてしまつた。二十日餘りの病中にも亡き夕顔の事が思ひ出されてならなかつた。病後かの女が頭中將の思ひ者でその間には今年三才になる玉鬘のあつた事も聞くことが出來た。頭中將が雨夜の品定に話した撫子の花といふのはこれであらうと源氏には思はれるのであつた。

二

以上の梗概によつても略〻明かな如く夕顔一卷の悲劇は彼の女の死によつて極まるのである。彼の女の死を頂點とした悲劇のカーブは前半においては漸次上昇してをり、後半に於ては緩かな下向を示してゐるのが見られるのである。即ち夕顔は頭中將の「いと忍びて見そめた」（帚木）女であり、その思ひものではあつたけれども、中將の北の方から「情なくうたてある事」（帚木）をかすめ言はれたのを氣にやんで子まである仲でありながら、這ひ隱れてしまふ程の弱々しい氣質の持主だつた。源氏が病氣見舞に訪ねて行つた大貳の乳母の隣家にたまたま夕顔が來てゐた事によつて、はじめて彼の女はこの卷に登場するのである。夕顔の花を隨身に折らせにやつた所、これにのせてと女の童して扇を差出させ、しかも

その扇には「うつり香いと染み深うなつかしう」してをかしげに歌が書いてあつたので、源氏は例のうるさい心からこの隣の女に心を動かし、惟光を介して夕顔に通ふやうになつた。源氏は顔もさだかには見せず、夜深く出入なぎしてゐたので、夕顔もはつきり誰とはわからなかつたけれども、源氏の態度は「手さぐりにも」貴人とわかるので、心のうちにはあの人ではないか位に想像はしてゐた。千世の契をかはした八月十五夜から十六日にかけての二日は源氏にとつても夕顔にとつても忘れられない懷しい時であつた。夕顔の「細やかにたを〳〵として物うち言ひたるけはひ」もいたいけに愛らしいものであり、分別の點が少し物足らぬとは思ふものの「なほ打解けて見まほしく」思つて遂に女を乘せて車を河原院へやつたのは、源氏にとつても樂しい時であつたに違ひない。あづかりの「いみじく經營しありく氣色」に乳母の右近もいよ〳〵源氏なる事を知つて華やかな生活を約束せられた姫君の幸を喜び、夕顔も亦夕映に意外に立派な源氏の顔を見てその幸福にひたつてゐる。これらの樂しい場面は次に來るべき陰慘な死の場面と相映發してよく悲劇的な效果を收めてゐるものと言ふ事が出來る。

「いと痛く荒れて人目もなく遙々と見渡されて木立いと疎ましく物古り」「氣近き草木などは殊に見所なく皆秋の野らにて池も水草に埋れ」たけうとげな所の樣を見ては、「氣疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども我をば見許してむ」と强がりを言つて「物恐ろしうすごげに」思つてゐる夕顔を慰めてはゐるけれども、既にこの言葉には宵打過ぐる程とろ〳〵とまどろむ源氏の枕上に立つ變な女の出現を豫想させるに足るものがある。

夢の中に變化の女の怨言を述べて側に臥してゐる夕顔をかき起さうとするのを見ておそろしさに眼を覺してみると火も消えてゐる。（火を巧に用ゐてゐることは後述）手を叩けばがらんどうの大きな部屋にこだまして氣味がわるい。源氏自ら從者を呼ぶために西の妻戸に出て戸を開けてみれば渡殿の火も消えてゐる。

紙燭もて參れり。（中略）「なほ持て來や。所に從ひてこそ」とて召し寄せて見給へば、ただこの枕上に夢に見えつ

る容貌したる女面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそ斯ることは聞けといと珍らかにむくつけければまづこの人は如何になりぬるぞと思ほす心騒に身の上も知られ給はず添ひ臥して、「やゝ」と驚かし給へど、たゞ冷え入りて息は疾く絶えはてにけり。言はむ方なし。頼もしく如何にと言ひ觸れ給ふべき人もなし。法師などこそはかゝる方の頼しきものには思すべけれど、さこそ心強がり給へど若き御心地にていふかひなくなりぬるを見給ふにやる方なくてつと抱きて「あが君生き出で給へ。いみじき目を見せ給ひそ」と宣へど冷え入りにたればけはひ物うとくなり行く。

のあたりは夕顔全篇中の最も凄慘な場面として悲劇の頂點に立つものでなければならぬ。

「まづこの人は如何になりぬるぞと思ほす心騒ぎに身の上も知られず」歎いてゐた源氏もつめたくなつた骸を抱いては「内裏に聞し召されむ」事をはじめとして「人の思ひ言はむ事」「よからぬ童べの口ずさび」など世間の評判を氣にしないではをられなかつた。既に頂點からやゝ下りかけてゐる事が目立つのである。夕顔との最後の別に東山の尼の住居を訪ねてのかへるさ加茂堤のあたりで馬よりすべりおちる程夢現の境を辿り、歸邸後は遂に病床に呻吟するなど悲劇の下向時にあたつても多少の抑揚は見られるけれども病後右近から夕顔の素性をきかされるあたりは全く平靜に立歸つてをりおもむろに亡き夕顔をなつかしんでゐるのである。

三

夕顔は柔和大樣の性格の持主であり、若々しさを多分にもつてはゐたけれども思慮あり重々しいといふ點には缺ける所があり、男の味をも知らないではなかつた。從つて又「世になくかたはならむ事なりともひたぶるに隨ふ心」を持つてをり、源氏との關係もここに展開せられたのである。

又彼女の性格としてつらい事憂い事かたはらいたい事などをも深く考へこんでゐる樣な樣子はしなかつたので、隣の家

家の賤の男の聲を耳にしても消え入る程には恥しいとも思はなかつたし、頭中將の北の方から「情なくうたてある事」をかすめ言はれても、胸には思ひ惱みながらも、中將にうちあけようとはしなかつたのである。彼の女のかゝる内氣な性質は死後乳母の右近かその素性を源氏に語る言葉のうちにも「世の人に似ず物づつみをし給ひて」として現れてゐるのによつても窺はれるであらう。

夕顔に對する源氏の愛情は「何處にいと斯うしもとまる心ぞ」と自らあやしまれる程であり、人目をおぼして隔てをおく夜なぎは忍びがたく「なほ誰となく二條院に迎へてむ。若し聞えありて便なかるべき事なりとも然るべきにこそは。我が心ながらいとかく人にしむことは無きをいかなる契にかありけむ」と思はれるのであつた。源氏が夕顔の如何なる所に捨てがたい愛を感じたかは明かではないけれども、彼の御息所などの「いと物をあまりなるまで思してしめる御心樣」の端正すぎるのに對してこの女は「物深く重き方は後れて」はゐるものの「柔におほどきて」をり「世になくかたはならむ事なりともひたぶるに隨ふ心」のあるのを哀と思つたのであらう。

四

源氏の尼君訪問に際して隣家の夕顔との交渉を生じたのを、門あけるのを待つ暫くの間としたのも面白いが、「御車入るべき門は鎖したりければ人して惟光召させて待たせ給ひけるほど」なる文をうけてやうやく出てきた惟光に「鍵を置き惑はし侍りていと不便なるわざなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬ邊なれど亂がはしき大路に立ちおはしまして」と畏りを言はせたのも亦巧みと言ふべきである。

特に夕顔の宿りの邊りの賤民の狀況をうつし

「あはれいと寒しや。今日こそなりはひにも賴む所少く田舍の通ひも思ひかけねばいと心ぼそけれ。北殿こそ聞き給へや」など言ひかはすもきこゆ。

なぎと言つたのも、賤民の事なぎは口にするのをあまり好まなかつた貴族文學としては珍らしいものとして注目に値するものがある。

更に物のけ出現、夕顔の死の場面にあつては

○物におそはるゝ心地して驚き給へば火も消えにけり。

○西の妻戸に出でて戸を押しあけ給へれば渡殿の火も消えにけり。

○火はほのかにまたゝきて母屋の際に立てたる屏風の上こゝかしこの隈々しく見ゆるに物の足音ひし〳〵と踏み鳴らしつゝ後より寄り來る心地す。

の如く巧に火を利用し、火が無ければこはいし、あつても亦氣味のわるい人の心をよく描いてゐるばかりでなく

○手を叩き給へば山彦の答ふる聲いとうとまし。

○まして松のひゞき木ぶかく聞えて氣色ある鳥の枯聲に鳴きたるも梟はこれにやと覺ゆ

なぎと眞夜中闇のがらんどうの中でこだまする物凄さを描き、たゞならぬ鳥の聲によつて小氣味わるさを現したのも夕顔の死の場面をして一層凄慘なものたらしめるに役立つてゐるやうである。

五

平安朝人の生活は晝よりも寧ろ夜にあつた。詩歌管絃の遊はもとより、麗しい戀の種々相の如きも夜の世界を舞臺としてこゝに繰擴げられてゐるのが見られるのである。

女の門近き廊の簀子だつものに腰をかけては月を眺めながら懷より笛を取り出して吹きならす男もあれば、方違に中川あたりに宿つてその家の女主人公と契をかはす貴人もあり、もののまぎれに人の子を宿す因果な女性も少くなかつた。長雨晴間なき頃內裏の御物忌のさしつゞいては退出する事も出來ず御殿油をかこんで美人の品定に徒然を慰む貴公子もあつ

た。

戀の法悅の場面にあつても必ず怨靈がつきまとひ、何處となく暗い影の漂つてゐるのも、夜の世界を背景としてゐるからである。薄明の夜の世界に跳梁する物怪生靈などは病氣とか出產などの人の虛をついて現れ、樣々の名乘りをしては喧騷を極めるのであるが、遂に驗者の祈禱によつて多くは調伏せられるのである。平らかに御產の終つた時などはよりましにかりうつされた物怪どもの妬がり惑ふけはひも物さわがしかつた。こんな時にこそ汗おし拭ひながら退出する山の座主をはじめ高僧達の姿はいとも崇高に眺められたであらう。

夕顏の卷はよく戀愛の法悅とその影にひそむ夜の淒味とを寫し得てをり、源氏全篇に漂ふ薄明の情趣はこの一卷によつても充分味ふ事が出來るのである。（昭・八・五・一〇稿）

○附記　この文章は目下奉天の教育研究所で講じてゐる日本文學評論序說の一部をなすものであります。御叱正を給はれば幸甚と存じます。

八田知紀と高崎正風の紀行文

波多江種一

八田知紀には紀行文が三つある。（イ）笠沙の浦つと（ロ）藤川紀行（ハ）高雄紀行で何れも鹿兒島近くの、今日の便利な交通機關を利用すればゆつくり日歸りも出來る程度の行程を、吟詠と酒と草鞋の暇にまかせた、そのくせ筆の上ではやたらに先を急ぎたがる旅であつた。此の三種の紀行は鹿兒島圖書館の所藏であるが、この外にまだ未發見のもの

で、どうかするとこのまゝ永久に姿を此の世に見せないで消えてゆくかもわからないものがあるらしい。知紀や正風に關しては今後少くともう二三種は新資料の出てくる希望がある。といふのはさうした小旅行を、歌と酒の交換と、手紙がはりの無沙汰詫びとを兼ねて、名所名勝を目あてとして機會ある毎に彼等はこゝろみたらしい形跡があり、そしてその都度それを一篇の紀行文に綴ることが、同志へのそれとない自慢であり、又綴つて見せることが同僚への不文の義務でもあつたやうであるから。

それで私も慾と二人連れで色々探索の手をつくしてはゐるものゝ、まだ正風の加佐々紀行を見出した以外には別段得物もないが、あきらめるにはまだまだ早過ぎると思つてゐる。一度これらの紀行のあとを辿つて古人の俤を偲びつゝ、新しい手蔓でも求めようとは思つてゐるが、日頃雜務に追はれて餘暇がないのと、一つは未だに鹿兒島方言に馴れないためにえ果さずに居る。

知紀の右の三種の紀行のうち年月を明示したのは（ロ）藤川紀行で天保八年酉正月とある。（イ）笠沙の浦つとは知紀の識語はないが此の旅行にはさはることあつて同行しなかつた樺山資雄の序文によつて、それが安政二年神無月の頃であつたこと、その題名さへ資雄の命名であつたことを知る。そして正風の――その當時まだ親義であつたが――加佐々紀行の冒頭に「おとゝしの秋はかりにや師の大人かさゝの崎にあそひ玉ひしをおのれえしたかハすいとくちをしうおもひをりしに」云々とあつて、これが安政四年の著作であるから逆算して丁度安政二年の秋となつて、資雄の序文に誤りのないことを證してゐる。（ハ）高雄紀行は年月日の記載がなく別段調査もしてゐないが、本文に「已れ四十年餘りの昔よりふみなれし道なれども老の坂こえたれハ行先の覺束なさに」云々なところから、餘程後年のものと思はれる。形から見ても最も小形で年寄の短氣一徹を思はせ、文章もごこやら枯淡なところがあるやうな氣がするのは強ち先入主のみのせいでもあるまい。恐らくは三種のうちでも最後に位するものと私は思つて居る。年譜でも繰つたら直ぐわかるのだ

らうがそこが研究の不便と貧乏暇なしで、いやはや残念なことではある。

私は高崎正風の加佐々紀行を紹介した時に、正風や知紀は桂園派で古今集を崇拜したが、隨つて人としては貫之に私淑したらしいこと、その紀行がどうやら土佐日記を摸したらしいことを述べておいた。その推定は幸に大過なかつたと思ふが、それは何も正風のみのことでなく、知紀の三種の紀行を讀むといよ〳〵その感をます。で土佐の摸倣といふことは正風の場合は或は間接で知紀を中に置いてかとも思ふが、やはりさうではないといふ方が正鵠を得て、而も正風のためにも喜ばしいやうである。勿論その間の事情は非常に微妙で正風が師知紀の影響下にあることは言ふまでもないから、その意味でなら間接ではあるが、私が言つてゐるのはその一面の他に知紀によつて貫之への眼を開かれた正風は、自ら赴いて土佐を鑑賞した結果の少くないことである。然し大觀すればこんなことは景樹の末流の誰でもがさうであつたとも言へば言へさうである。それにしても此の問題は知紀と正風とにとつては可成り重大なことであると思ふ。

先づ知紀に貫之の影響の最も露骨にあらはれて居るところを拾ひ集めると笠沙の浦つとでは

小湊といふ所より舟にのる則文

船まつとたゆたひをれハ夕鴉そなたにゆくも羨まれつゝ

（二首略す）

今夜しも風浪あらしあら波のたちこむ先に舟はこかなん

なとうたひもはてぬにいと高くなりぬ知紀

大浦潟あら波高く立來めり月の御舟もこさむとやする

（一首略す）

親之

大浦潟舟こきくれハ磯の上の月影ふミて千鳥なくなり

（一首略す）

これはかりの波ハよの常なりミ舟子ミもいへと汐路の八百合より打よせくるさまハミもなれぬ人のミにて船心地例ならすいミからうしてそやはかり片浦にハつきぬこゝなる宮原景春もかねてまち渡りける上に定中あないしてけれハ例のねもころ也

土佐の船醉が手本であつたのではあるまいか。藤川紀行では

ゆく〳〵このあたりの古戰場のこゝ語りかはすに知紀

木の下のさるめをこゝにひきよせし力のつなをおもひこそやれ

こいへハ汐海のほゝりならねゝけにあされたりこそ笑ふ

「あざれ」は物語では源氏の花宴に見えるが、他は辭書類をのぞけば土佐だけかゝ思ふ。前後の文面でこゝはどうあつても源氏からではないらしい。

雨やまねハけふまてハゝ止めらる・にいかにせましゝ思ひたゆたふ程あるしのいつそやよゝたりこて

一重たに花はさかねゝ鹿のゝのは隱れにてもなるそ悲しき

こは今の世の中いろにつき人の心花になりにけるをうれたゝたる心なるへしゝ皆腹に味へり

は言はずゝ知れた古今序の詞。これらは最も露骨なもので、確なる證據は口に出來ないまでも、さうではないかゝいふ疑問の濃厚なゝころは數へるに暇なしである。

正風の笠沙行はその紀行の最初の言葉によつて師知紀のあゝを慕ふのが最大の原因であつたこゝを知るが、恐らくは南國の歌人の間の流行であつたらしい紀行文を通じて、そこに美しい師弟の情愛を見るこゝが出來る。勿論歌枕に自らの詩

嚢を肥やさうとする意圖は伴つてゐるが。そして此の師弟のよにも美しい情愛の絆が二人の紀行文の上に歴々とあらはれてゐるのである。正風の、今のところ唯一つである紀行文と、知紀の笠沙の浦つとを比較すると、何と多くの類似が指摘されることか。用語に、筆づかひに、行程に、組織に。夜をこめて立ち出でて、雨にふりこめられては心ならずも例のねもころなるもてなしにあひ、海上の月に鳥をあはれみ霞をうらやみ、薩摩富士ひらき、の嶽に宇宙の神秘を感じ、旅宿旅宿の夜のつれづれには鄙ぶりの歌に耳をかし、題を設けて歌を詠み、酒にあやふひ手もしどろに書きちらし、そして最後に惜しい別れをふりきつて家路に急ぐ。我々は著者の名を入れかへてもさう不便も不都合も感じないだらう。數へてもたかの知れた雅語を組合はせて、僅か二年の後に同じ道を同じ方向に歩いたのを綴るのである。而も此の種の文の書くべきことはきまつて居る。幹から根まで異質的な文章が第一出來る筈はないが、それにしても正風に敬虔な師への追慕がなかつたならば、かくまでひどい類似はなかつた筈である。正風は正風で別に土佐日記を摸しはしたが、やはり直接の手本は知紀の紀行であつた。

知紀と正風の紀行文の間にかういふ關係があるとすれば、上記のやうに明確に貫之の摸倣が知紀にあるからには、たとへ正風には確たる證據がないとしても彼が土佐を念頭にして筆を取つたらうことは、およそ差障りなく言へると思ふ。

× × × ×

會報を飾るためといふ幹事からの注文である。餘り長くなると迷惑であらう。これらの紀行に就いて調べなければならないことも多いが、他日を期すことにして最後に知紀の交友を此の三種の紀行文によつて知り得るものだけあげておかう。

樺山資雄　則文　親之

相德定中　野元綱紀　土持政之

池田某　景春　赤塚眞積
佐々木某　最上實秀　豐田豐秋
高崎親義　折田寧行　吉原元珍
濱崎正標　久留景賢　鎌田恕兵衛
河原某　村山時村　岩下方平
井上長秋　町田俊德　中路延年
藤井正德　國友文友

以上は全部歌仲間であるが、この外

有馬意運　東郷原泉　雲生

の三人の名前も見える。もつとも雲生は交友といふ程の親密さはなく、只だ一度汲み交はしたに過ぎないやうである。

× × × ×

淺學菲才のこゝで隨分ひどい誤謬も多からうと思ふ。お氣づきの方の是正は日でりの雨である。

（五月三十一日夜十時）

日記文學の創作性

藤井毅

深く考へれば相當に錯雜した問題であるが、これに就いての閃光的に私の頭を遮つた考へを書いて見る。

日記文學の現實性が濃厚であることは、此の樣式文學の特性によつて明かであらう。其の諸特質中私は日記文學が「(一)自己の體驗を主題とするものであり從つて空想的分子が少く他の樣式の文學に於いて見るやうな實在ならぬ假定の世界(現實とあまりに間隔的な世界)を創造することがないこと。(二)又外的條件に制約されるといふことがないために一方からいへば無技巧的であるけれども、それだけ個性といふものの姿、即ち其の時代人としてのそれを純眞に表はして居ること、(三)そして對象が過去に置かれ而も其の過去に如何にありしかを凝視し批判した自己告白の文學である點」などが此のことを力說するに有力なる資料的立場に擧げられ得ると思ふ。

然し此等は決して日記文學に於ける創作性を否定し、又創作性の存在餘地不可能を主張するところの何物でもないのである。のみならず寧ろ此の現實性濃厚說を力づける此等資料的立場にある諸特質中に既に日記文學なるものに於ける創作性分子の存在、否、可成り波及的勢力あるそれの胚胎が示されて居るのであり、逆に日記樣式文學に於ける創作性の淡白ならざる介在の證左的立場にまで持來されることを意味するものとなるのである。

日記文學の現實性は確かに濃厚である。而しこれを以て日記文學のすべては現實性分子によりてのみ成立するとはいへない如く、此の樣式文學には創作的分子を現象的に認め難いからとの理由で此のものに創作性がないとは亦云ひ切れない

であらう。」

此の創作性とは複雜なる意味を有するものであつて、これの吟味に移る前に私は先づ告白といふことに一瞥を與へ、次に告白文學と其の他の文學との境界線の決定といふやうな邊にまで推し擴めて此の論を試みて見る。」

抑〻自己告白といふもの即ち自己の內的生活の眞の告白といふことは、理論は別として、果して容易に行はれ得ることであるかどうか？これは實際に於いて極めて困難なることではないであらうか。如何となれば自己告白なることは屢々自己廣告とか自己の誇張とか或は又自己欺瞞といふやうな渦の中に引きづられ易いからであり且つこのことに就いては白村をして『おのれの心の生活の暴露狂があるなら私はそれを一種の藝術的天才と見てもよいであらう』とさへいはしめた程である。どれほど秀れた藝術上の天才でも眞の自己を赤裸々に呈露してゐるものは意外に少く否、むしろ殆んどないとも云はれ得る狀態であり假令意識的にでも無意識的にもせよ讀者とか傾聽者或は觀客、批評家といふが如きものを全く眼中に置かないで即ち此等のものを思考圈外において製作してゐる人は極々稀であり、幾分かは相手に對しての微妙なりともの順應的態度が採られ得べく、又現に採られてゐることはどうしても拒むことの出來ないところである。これは古今東西を問はず人間の支配される現象であると思ふ。

具体的の擧例をしてみると、バイロンのやうに最初から自己告白を標榜した人の作品に衒氣の滿々としてゐるのは勿論許容せられなければならぬところである。が、しかしルソオ、杜翁、其他の懺悔錄と銘うたれてあるものにもそれが率直に飾なく自己を告白したものとは信じ受け容れられ兼ねるものがあるのであつて、こゝに告白についての再吟味の必要を痛切に感ぜしめられて來るのであり、その歸結として『完全に自己を告白するといふことは何人にも出來ることではなく、そこにはやはり眞の告白といふものにとつて不純物の混入が意味されてくる』のである。蓋しこの混入物とは何か！これに創作性の崩しが相ひ當てられるのではなからうか。

扨、告白文學と其の他の文學との境界線についての決定であるが、これは告白文學を此の創作性の有無の一事象によつてのみ決定することは既述からあまりに根據の薄弱なる不可能な問題となつて來やしないかと思ふ。

又こゝには必然的な關係を持ち來すものではないかもしれぬが、私は告白文學と他の文學との境界を告白といふことのみを以ては亦判然と區別出來るものではないことも考へる必要のあることを茲で附言的に强調したい。即ち『完全に自己を告白することは何人にも出來得ることではなく又全時に自己を告白せずには如何なる表現も出來得るものではない』からである。如何に告白を嫌つた人の作品に於いても吾人は隱約の間に作者自らの或何物かを把握し得る樣に感ぜしめられるのがまた常套であるからである。從つて告白文學と他の文學との嚴密なる境界線は見掛け程に劃然たるものではないといふ結論に達して來る。

依て告白文學の中に絕對の告白のみを求め又期待することは困難といふべきであり、絕對の告白のみを求めることが出來ないといふことは換言すればやはり延いては創作性の侵入可能を裏書することにもなるのではなからうか。

かうした二つの見方からしても創作性分子の介在は、告白文學にも不回避的といふことになつて來る。この觀念に立脚して日記文學の創作性に强い吟味を與へて見る。

日記文學が自己告白の文學であり告白文學に創作性の介在の認められる論段迄に來た以上、畢竟、告白文學の範疇に屬する日記文學に創作性の介在があると逆亦眞の法則を適用することも少しく早計の虞れはあるかもしれぬが支障ないことではないと考へられる。

かくして今平安朝の諸日記について眺めて見るに土佐、蜻蛉、和泉式部、紫式部、更級などをはじめ其の他諸日記に於ける如くそれ等は其の日その日に筆がとられたものではなくて後日に於てまとめられたもの——よしそれが當時の和歌の存在があり此の前後の詞書が延長發展を企圖しあまれた日記——であるといふ樣な場合にもそこには時間的の隔りがあり

且つ作者の回想に依りてものせられるものであり、それは心理狀態、經驗の想思であつて、これは記憶によつてなされるものであるが故に其の記憶して來た內容がその年月間に變化されたエラー（これは無意識的になされる創作といへるであらう）を含むことは免れ得ないところであり、その含有量增大の可能性は時間に正比例して行くことも考へなければならないであらう。そして此の點は日記文學に創作性を與へる力强い一因として見なければならない。

又和歌が過去の思出しの葉として殘つてゐた樣な場合に於いても和歌の改作とか新歌の挿入とかいふ問題が編纂に際して必然的に伴つて來はしないか、少くとも起り得べきことではなからうか。これが又日記文學への創作性との關聯をもつて來る。（此の詳論はいつかのべることにする）又編者の心理として、何れの日記を見ても、少くも單に自己の思出の記、備忘錄としてのみの目的にてものせられたものではなくて——即ち、土佐とか、蜻蛉、更級以外のやうにはつきりと人に讀まれることを豫期した文字が這入つてゐないものに於いても編者の共通性として假令當時の人に見せる或は見られるといふことを或は考へ期待してなかつたにしても、又それは假りに淡い〳〵ものであつたにしても、やはり後世なりに於いて誰かに讀まれ見られ自分の知らない未來の誰かの上に多少なりとも自分を美しい夢として見せるとか或はこの斷片なり何行かなりでもが或意味の敎示といふ寄與をすることをかを希望してゐなかつたとは考へられないところのものが存するのである。そしてそこには自ら回想の美化されんとするの傾向も浮び上つて來てゐるのであつて、それは意識的の創作性の含有の證左にもなるであらう。しかし美化の傾向はそれの理想化であつて架空な世界の作られるのと創作性に於いて强弱の差があり、現實に近いといふ歸着を見るのである。

即ち日記文學の現實性は他の文學のそれより鮮明に濃厚であり、それに反して創作性は他の文學殊に物語小說構想のものより微弱であり且つ豐富ならざるのが正態であると思惟するのが妥當ではないかと思ふ。しかしこれは單なる私見である敢へて大方の御敎示を仰ぎ度いと思ふ。（昭和八年六月十日稿）

和泉式部日記「おひたるあし」考

青　敏　夫

一

日記の初めの所に、

又御文あり。言葉なゞ細やかにて、

かたらはば慰むかたもありやせむいふかひなくは思はざらなむ

あはれなる御物語も聞えばや。忍びて晩にはいかが。

と宣はせたれば、

慰むと聞けば語らまほしけれど身のうき事に云ふかひぞなき

おひたるあしにては、かひなくや。

と聞えつ。

とある。即ち問題は後の式部の愛人であり、且つ彼女と共に此の一篇の主人公たる冷泉院第四皇子敦道親王への返歌につけた式部の詞であつて、之を單に語釋的にみる時はさして大きな問題とするには足らないが、然し後述するが如く此の一句をもつて式部の傳記考證の有力なる原據とせられるに至つては、問題は可なり大きくなつて來る譯である。

二

從來、此の日記に就いては、その文學的價値の尠い（註一）ためか、或ひは又彼女自身歌人としての存在が餘りに大き

かつたためか古註釋書は皆無であつて明治以後の叢書類の頭註を除いては最近纔に一、二の口語譯を見うるのみである。今此の句に就いて從來の解釋を見るに、次の三說にわかれてゐる。（註二）

（A）「老いたる葦」（校註國文叢書・新釋日本文學叢書）

（B）「老いたる足」（校註日本文學大系・有朋堂文庫・和泉式部日記新釋・岡田希雄氏說）

（C）「生ひたる蘆」（日本古典全集）

右の中で（A）は最も古い說であつて、要するに、「老いたる葦には穎（かひ）―草の芽―（甲斐）がない」の意味であり、（B）は最も有力な說とされてゐて假りに竹野氏の新釋に從へば、

「私ごとき年老いたる身では宮樣の御相手としては詮ない事です。「老いたる足」とは「老いたる身」の意にて此の時親王廿三、式部卅にて特に斯く云へり。」

と云ふのであつて、（A）（B）共に式部が親王の御歌に對し「老いの身」故に辭退したと云ふのである。次に（C）は私には最も正しいと思はれるのであるが、之は單に「生ひたる蘆」と宛字してあるのみで理由とすべき解說は何等試みられてゐない。

（註一）藤岡作太郎氏國文學全史平安朝篇

（註二）全譯王朝文學叢書本（川那邊修氏擔當）は何故か、此の句に就いては全く觸れてゐない。

三

先づ（A）に就いて云へば、穎を甲斐に通はした例もないではないが、元來「老葦」の如く植物に就いて斯かる用例は殆んどない樣であるし、又それでは文章の前後の意味も妥當とは思へない。次に（B）に至つては殊更その感を深くせざるを得ない。常識で考へても、斯かる語が幽婉、纖細を旨とした浪曼的な此の時代に、然も比類なく豐富な詩囊と自由に

語彙を驅使するの才に惠まれてゐた式部にして果して發し得られたであらうか。私にはどうしても贊成出來ない說である。之は正しく「生ひたる蘆」とすべきで、既に古典全集本が採つてゐる所であるが、前述の如く單なる宛字が施されてゐるのみであつて如何なる意味かは明示されてゐない。之は矢張り引歌の存する所であつて、六帖卷三に、

何事も云はれざりけり身の憂きは生ひたる蘆のねのみなかれて（赤人）

とある。即ち憂き自分の身は恰も水洲に生ふる蘆の根の流れる樣に常に打泣かされて何事も云はれないの意味で、日記の場合、式部の返歌の「語らまほし」「身の憂き」と「生ひたる蘆」なる諸句と好く相照應し且つ句の意味も判然して來るのであつて、浮き（水洲、憂き）根（音）、流る（泣かる）の如くに蘆、菖蒲草等の水生植物に寄せて身の不境を詠んだ技巧は當時の歌には多くその用例を求めうるのである。

うきに生ふる葦の根にのみなかれつゝいきてよにふる心地こそせね（續後拾遺、讀人不知）

蘆の根の弱き心はうき毎に先づ折れ伏してねぞなかれける（六帖、讀人不知）

世中のうきにおひたる菖蒲草けふは袂にねぞかゝりける（後拾遺十七、隆家）

の如きを始め、式部自身の歌にも、

うきに生ひて人も手觸れぬ菖蒲草唯いたづらにねのみなかれて（家集第四）

を始め他に數首の例が見えてゐる。

斯くてそこには尠くも「老」の意は認められないのであつて、式部の場合は、かつての愛人彈正宮爲尊親王（註一）に死別して未だいくばくもなく、故人を追慕する悶々の情やる方なき彼女の當時の心境の告白であつて、之を果敢ない葦に寄せて詠んだのに過ぎない。尠くも歌の表の意はさうこるべきで斯く解すれば日記の冒頭の、

「夢よりもはかなき世の中を歎きつゝ明し暮すほどに、」

より始つた宮との關係の經路も都合よく解釋出來て穩當だと思はれる。不充分ながら以上で（A）（B）說の妥當でない點を云つたのであるが試みに今、諸傳本に就いて見るに、類從本を始め、應永本、音無文庫所藏の享保本等總て「おひたるあし」とあつて、「おい（老い）」とあるのは一本もない。假令、假名遣の混淆も考へねばならないにせよ一層（A）（B）說は不利の狀態にあると云はねばならない。

（註一）親王は長保四年六月十三日歿、從つて一年も經過してゐない。

四

他の平安朝閨秀作家の多くがその傳記を詳にしない樣に、わが和泉式部に就いてもその例に洩れない。岡田希雄氏は曩に「和泉式部傳の研究」（註一）なる詳細なる考證を發表せられて、

式部は「老いたる足にてはかひなくや」と御返事申しあげてゐるのであつてごう考へても式部は親王よりは年上であつたと見る外はない。

と云つて、此の一句を可なり重く視て式部の年長說の一つとして論じてゐられるが、のみならず、更に氏は最近「和泉式部」（註二）に於て、今度は先の諸說には全く觸れないで、

親王時に廿三才、式部は日記中で「老いたる足」と自ら云つて居る通り宮よりは年上であつた。

と云つて單に「老いたる足」の一句のみをもつて彼女が年上であつたと斷定してゐられる。式部の生年に就いては古典全集解題にも與謝野晶子氏の精密なる考證があるが、それは暫く別として、尠くも「おひたるあし」の一句に關する限り、それは必ずしも式部年長說の根據とはなり得ないかと思ふ。

（註一）國語國文の研究（昭和二年一月――十數回）

（註二）岩波講座日本文學（昭和六年）

五

最近、宮田和一郎氏は「日記文評釋」（註一）に於て、「浮名の立つの惜しさに人知れずお慕ひ申しあげてゐるのでは仕方がありますまい」と通釋されて、

「老いたる足」とあてた本もあるがさうは考へられない。意味は判然しないが、必ず引歌のある所である。續後撰戀一人丸「いその邊に生ひたる蘆の名を惜み人に知られで戀つゝぞふる」によつたのではなからうか、しばらく之に從つて通釋した。

と云つて假說を立ててゐられる。「老足」を否定されたのには元より贊成であるが、引歌に就いてはどうかと考へられる。私の考へでは當時未だ氏の說の樣に式部の心は動いてゐるとは思はれず、又引歌と式部の歌との照應の上から考へても私には氏の假說は少しく妥當でないと思はれる。

（註一）續國文學講座（昭和八年三月十五日發行）

實は此の小文は昨年の會報にでもと思つて一寸書いて置いたのであるが、最近、偶然にも宮田氏の說を拜見して、一部分、考へが符合したのと既述の如くその一部分が少しく不審に思はれた事から再び補つたのである事を御斷りして置きます。（昭和八、五、二四）

ドンタク風景の放送を聞きて

橋本元二郎

昨日博多からラヂオでドンタク風景を
放送されて昔を思ひ出しました。

ドンタクの囃をこもにくちずさびラヂオの前に吾子こわが居り

消息に代へて

加藤卓一

洋服の金の釦を取替へて仕事着こする此の夏からは
眠れこて撫づればころのふこも、の近頃こみに肉付きにけり
氣嫌よく夜中に吾子が其の母に語らふ聲に我も目覺めぬ
時雨つ、夕べこなりぬ放牧の馬は馬ごち寄そひにけり
乳の出のよろしかるらむ寒き日は鷄のちりして妻こくひけり
高熱の兒は寢ながらも人形を持ちて遊べり死なさじこ思ふ
生花の餘りのつ、じ手洗の水にひたせり捨てかねつらし

○

月明り浚渫船の居たりけり
栗拾ひ呼べば近くに答へけり
柿はいで職員室の賑へり
相觸れて音する秋の竹林
春雨や門まで送るぬれながら
一曲のすめばいつしか春の雨
春宵の句會明るく更けにけり
橋を渡れば氷屋といつかなり居たり

日記の隅

暖や　砂にかゞめる　籠雲雀
庭池に　水をそゝげば　立つ蚊かな
蜂すこし　舞ひて分封　近きかな
塵のごと　分封蜂や　庭の空

分封や　花粉をつけて　戻る蜂
さびしさや　分封すみし　蜜蜂の箱
分封の　蜂にこざせる　二階かな
分封の　うすれて遠く　移るかな

志賀島雑詠

筍をきざみて船も午にちかき
枇杷ぶくろ花のごとなる島に着く
異國人カンバス据ゆる新樹かな
清水くむえごらんぜーの繪具皿
入梅や網小舎のへの夏薊
てんぐさ干しつゆりの砂のいろにぶく
茱萸もなく路はいたづら草いきれ
能古を見ておの〳〵枇杷を吸うてあり
海蛆ちる磯わをゆけば花大根
大根の花に外海の潮さわぐ

山田猛

合歡の花了れば南風の鱚子釣り
泳ぎては樗花さく蔭に拭け
ぎらの鳴るはや夏蜜柑買はばやな
枇杷さげて船窓にし倚ればやゝ疲る
歌集よむ梅雨入のうみも戻りなる

（八、六、十）

先輩萬來福帳

——研究室だより——

昨年の休暇には初めの頃相羽尚氏が久振りの溫顏を見せられました。折柄御來室の小島先生と御一緒に大いに淸談に時を忘れました。その後八月半に金子善治郎氏が關西學院に於ける活動狀況を齎して颯爽たる姿を現されました。なかなかの御元氣です。波多江種一氏も扇子の柄を握りしめて二度程來られました。冬には馬場純一氏が瓢然としてやつて來られました。その機會を利用し在福諸氏の內、高木正藏氏は差支へがありましたが、長氏笹淵氏などと丁度その夕方大學に居られました小島先生に來て頂いて片倉ビルの一室で大いに『萬代』の盃を重ね、なほもあらず寒風の吹く博多の町に出てカクテルのグラスを擧げ遠隔の地にある諸兄の健康と發展を祝福していとゞ愉快でありました。この春加藤卓一氏が薩南のうるはしの乙女等を引きぐして博多旅行に來られたのださうですが、若い者の多い研究室だからとて訪問を見合せられたゞはさても殘念な次第でありました。（以下略）（笹月生）

雜報

二月十日（金曜）

卒業生送別宴會を對馬小路山利に於て開催、會する者春日小島兩先生をはじめとし二十名、定刻幹事の開會の辭に次ぎ春日先生より溫情に滿ちた送別の御言葉あり、之に對して延壽寺末稱氏卒業生を代表して謝辭を述べ直ちに宴に移つた。卒業生諸氏の輝かしい門出への祝盃と惜別の献盞亂れ飛び宴漸く酣なる頃、諸氏の隱し藝の披露あり送る者送られる者ともどもに時の過ぎゆくのも忘れて打興じ其盡くる所を知らなかつたが最後に萬歲三唱して午後十時半散會した。

五月六日（土曜）

國文學會例會を兼ねて新入生歡迎會を橋口町風洲屋に於て開催、春日小島兩先生をはじめ會する者二十三名、春日小島兩先生より有益な御訓話があり次いで自己紹介に移り茶菓を喫しつゝ心ゆくまで歡談した。

新幹事として、藤野邦雄、山崎忠夫就任した。

五月二十四日（水曜）

體育部主催の春季卓球大會が開催されて國史國文聯合チームが出場する。我が桑原正雄氏の奮鬪目覺しきものあり遂に優勝する所となり大いに氣勢をあげた。

六月二十七日（火曜）

第二學生集會所に於て例會開催の豫定（山崎記）

昭和八年度第一學期講義題目

春日教授	奈良朝文學史概論	
同	演習「源氏物語」	
同	演習「伊勢物語」	
小島助教授	中世文學思潮	
同	演習「近松淨瑠璃」	
同	演習「新古今集」	

編輯後記

◇私達の小さな赤坊「九大國文學會々報」は、此處に、五つの齡をかさねる事になりました。七五三の祝を行ふ年になつた譯です。

◇春日、小島兩先生、先輩、同學諸氏から戴きました玉稿は、產土神詣の新衣にも御喩へ申す事が出來ませう。原稿募集の期間が、はなはだ短くて、隨分無理な御願ひを致しましたにも拘らず、かくも見事な晴着を賜はりました事は、誠に感謝に堪へない所であります。

◇たゞ、編輯委員の未熟と不注意から、折角の晴着を、左前に着せてはゐないかと、懸念してゐます。若しさうした過失を犯してゐたら只管御寬恕を乞ふ次第であります。（藤野）

◇波多江種一氏より加佐々紀行本文最初の一頁の寫眞を送つて下さいましたのですが經費の關係上載せる事が出來ませんでした。惡しからず。

◇卒業生の方々がお納め下さつた終身會費が大分の額になりましたので之は會の基本金として今度郵貯金にしましたから一寸お知らせして置きます。尙會費未納の方は至急お納め下さる樣お願ひ致します。

◇卒業生の方々の原稿は勿論發行の都度御願ひする積りでゐますが隨時御送り下されば幸甚に存じます。

◇この會報が御手許に屆く頃夏休みも旬日に迫つて參ります。諸氏の研鑽と御健康を祈つて擱筆します。（山崎）

九大國文學會定欵

第一條　名稱及組織

本會ハ九大國文學會トヨビ、本學國文科教官、同卒業生、同在學生ニヨリ成立スル

第二條　會長及幹事

本會ハ國文科教官ノ中御一名ヲ會長ニ推戴シ、國文科卒業生、同在學生ノ中三名ヲ幹事ニアテル。

但シ卒業生一名ガ常任幹事ニ當リ學生幹事ハ任期ヲ一ケ年トシ在學二年ノ學生二名ガ之ニ當ルヲ通常トスル

第三條　會ノ所在

本會ハ事務室ヲ國文學研究室ニ置キ、常任幹事ガ會務ヲ總括スル

第四條　目的

本會ノ目的ハ會員相互ノ交誼親睦ト其研究生活ノ向上トヲ併セ收ムルニアル

第五條　行事

本會ハ右ノ如キ目的遂行ヲ庶幾スル一切ノ行動ヲ認メルモノデアルガ、通常左ノ如ク定メテ之ヲ行フ

（イ）研究發表會　懇談茶話會

何レモ適當ノ機會アル毎ニ之ヲ行フ

（ロ）卒業入學生送迎宴會、研究視察旅行

何レモ適當ノ機會ニ之ヲ行フモノデアルガ、宴會ノ場所及會費ハ其都度適宜ニ之ヲ定メル

但シ宴會ニ於ケル教官並ニ卒業生ノ會費ハ通常一圓ヲ增スモノトスル

（ハ）會員ノ不幸ニ對スル弔意

會員ノ死亡ニ對シ、本會ハ金十圓ノ香奠ヲ贈ツテ弔意ヲ表スル

但シ會員ノ一等親、配偶者ノ死亡ニ際シテハ右ニ準ジテ幹事適宜ニ取計ラフモノトスル

（ニ）會報ノ發刊

本會ハ毎學期會報ヲ發刊シ會員全部ニ之ヲ配布スル

第六條　會費

本會ハ右ノ行事ノ全部又ハ一部ノ費用支辨ノタメ在學生一ケ年二圓卒業生一ケ年一圓ノ會費ヲ夫々徵收スル。會員ハ毎學年ノ初幹事ニ之ヲ納メルモノトスル

但シ卒業生ハ一時金十圓ヲ納入スルコトニヨリ爾後ノ會費ヲ免除サレルモノトスル

第七條　定款ノ變更

定款變更ノ際ハ全會員ノ協議ヲ經テ行フモノトスル

以上

昭和八年六月

九大國文學會

昭和八年六月二十五日印刷
昭和八年六月二十七日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　藤野邦雄
　　山崎忠夫

發行所　九大國文學研究室

印刷所　福岡市極樂寺町六番地
　　九州印刷株式會社
　　電話九八番

印刷人　福岡市極樂寺町六番地
　　赤松顯三